

# 美郷町・松林山定徳寺について

## ー石見銀山百か寺の調査ー

西尾 克己・持田 直人

### 1. はじめに

戦国期から江戸時代にかけて島根県大田市大森町の石見銀山には、銀山六谷とも呼ばれた銀山集落があり、多くの坑夫や商工業者が住み、石見最大の町として繁栄していた。各集落の中には寺院も点在し、大森町に存在した多くの寺院を「石見銀山百か寺」と呼ぶ<sup>(注1)</sup>。しかし、17世紀中頃以降に銀生産が減量するにつれて鉱山集落も衰退し、寺院の中には邇摩郡内を中心として他所へ移ることが多くあった。

この度紹介する浄土宗九々王山松林院定徳寺<sup>(じょうとくじ)</sup>(銀山での山号・院号で、寛延2年(1749)に松林山種勝院定徳寺に改称する。)は銀山開発初期の天正年間(1573～1592年)の創建とされ、山吹城跡南麓の大谷地区に所在した。その後、江戸時代中頃の宝永7年(1710)に邑智郡吾郷村<sup>(おおち あごう)</sup>(現美郷町吾郷)に移転し、援助者(大檀那)となった地元の有力者山根八左衛門種勝<sup>(注2)</sup>により土地や建物

をはじめ、仏像、仏具等の大部分も寄進された。よって、大森から移されたものは扁額や本尊の仏像等僅かであった。

以下、定徳寺の石見銀山での様子的一端と、吾郷村に移った折の状況を中心に記述してみたい。

### 2. 定徳寺の歴史

#### (1) 石見銀山での定徳寺

**定徳寺の由緒** 寺に残る「過去帳1号」の縁起「寺伝」<sup>(注3)</sup>より知ることができる。これによると、開山は法譽慶公<sup>(注4)</sup>で、天正年間の創建とある。開山の法譽慶公は天正5年(1577)2月24日に亡くなった以外のことは記録がなく、また、寺の開基の創立者も不明である。2世は超譽残香で、天正17年(1589)に後陽成天皇から「定徳」の宸翰を、さらに文禄4年(1595)に本山の布教担当の輪番職<sup>(注5)</sup>に任じられ、紫衣を賜ったとある。このことから、

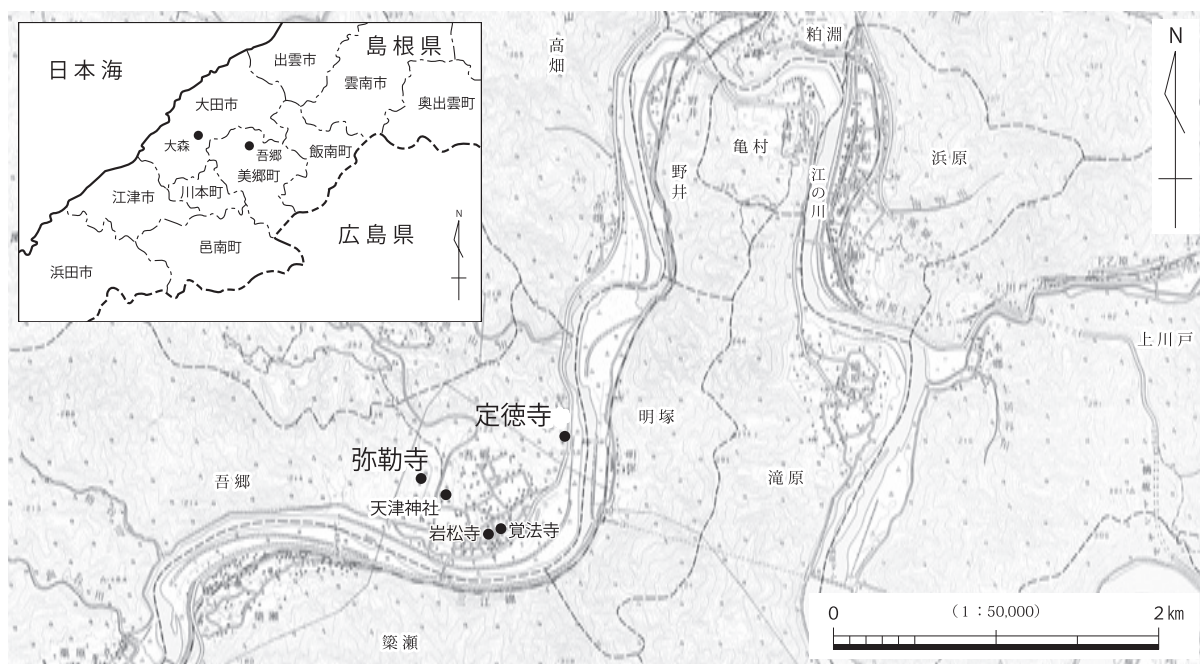


図1 定徳寺の位置図(地形図は美郷町管内図〈北部〉を使用)

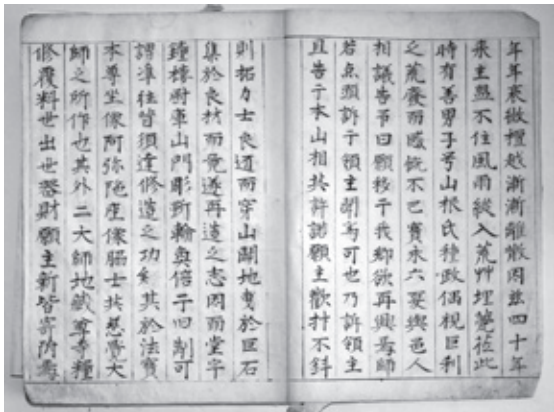
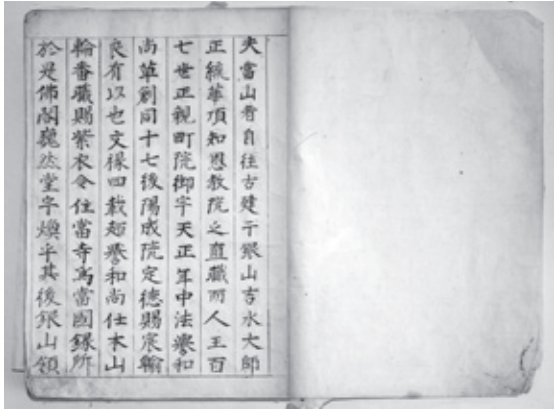


写真1・2 「内過去帳1号」の寺伝（一部）



写真4 定徳寺跡境内の岩窟と散乱する石塔

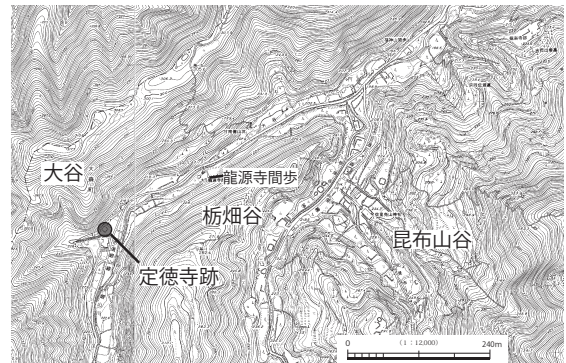


図2 石見銀山内の定徳寺跡位置図



写真3 定徳寺跡（北から）

浄土宗の高僧であったと考えられる。その後、3世から5世までは銀山での住職であったが、その事績については「寺伝」に記載がない。

**定徳寺跡** 寺跡は大田市大森町大谷地区の奥にある。坂根口番所跡に隣接し、西側には小川（銀山川）を挟んで降露坂に向かう街道脇（温泉津沖泊道）の字「元浄徳寺」付近に所在していた。境内は東西12m、南北24mの平坦地で、現在は畑地使用されている。東隣の平坦地は明治の地籍図の字名が「徳善寺」とあり、浄土真宗松林山徳善寺の跡であった

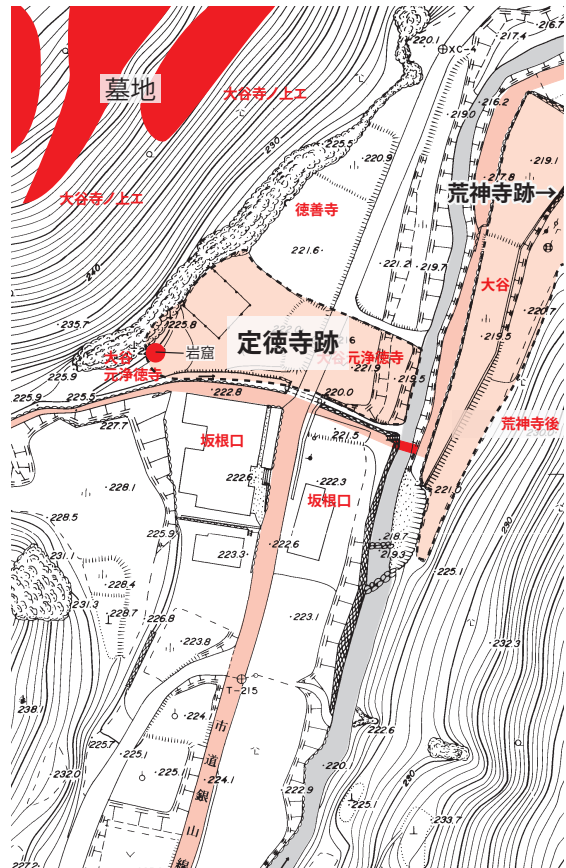


図3 定徳寺跡位置図（平成27年の地籍図に加筆）



写真5 定徳寺本堂内と扁額

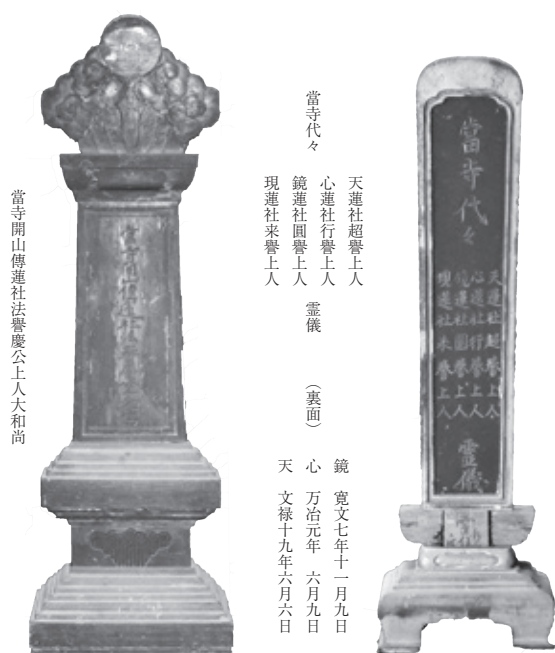


図4 定徳寺開山位牌と歴代住職（2～5世）位牌

と考えられる。明治初年の土地令の絵図<sup>(注6)</sup>にも同地に寺が描かれているが、明治6年(1873)、那賀郡旭町(現浜田市)に移転したとされる<sup>(注7)</sup>。なお、徳善寺の山号は「松林山」である。徳善寺の隣地にあった定徳寺の院号は「松林院」で、「松林」の文字が重なる。この付近の地名かもしれない。また、対岸の斜面の字名は「荒神寺後」である。よって法面と斜面との間の平坦地(元水田)には銀山百か寺の荒神寺があったと推定される。

## (2) 定徳寺の銀山時代の痕跡

**仏像・扁額** 銀山から今の定徳寺に運ばれた仏像などは、木造阿弥陀立像、後陽成天皇宸翰による扁



写真6 木造阿弥陀如来立像（旧本尊）

額、開基の位牌がある。

**木造阿弥陀如来立像（旧本尊）** 旧本像は木造で、高さ60cmを測る。本堂南西側の脇殿に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」に「□□不詳天正年中開山慶公和尚購求メ傳來」と記録が残る。また、全体の造形などから、京都などの中央で作成されたものであると考えられている。なお、この仏像は黒ずみ、当時の彩色を確認できないが、一部に金色を残している。

**開山から吾郷村移転までの住職位牌** 本堂の奥部には、内陣の東側奥の棚には住職の位牌があり、西の棚には元山根家の位牌が置かれている。東の棚には、開山からその後の住職、さらに大森の勝源寺中興(隋蓮社教譽上人)の位牌をはじめ、他の寺院の住職のものも混じっている。<sup>(注8)</sup> 定徳寺が銀山の太谷にあった時の住職の位牌は、開山が1柱、2世から5世の4人の住職は合わせて1柱となっている。

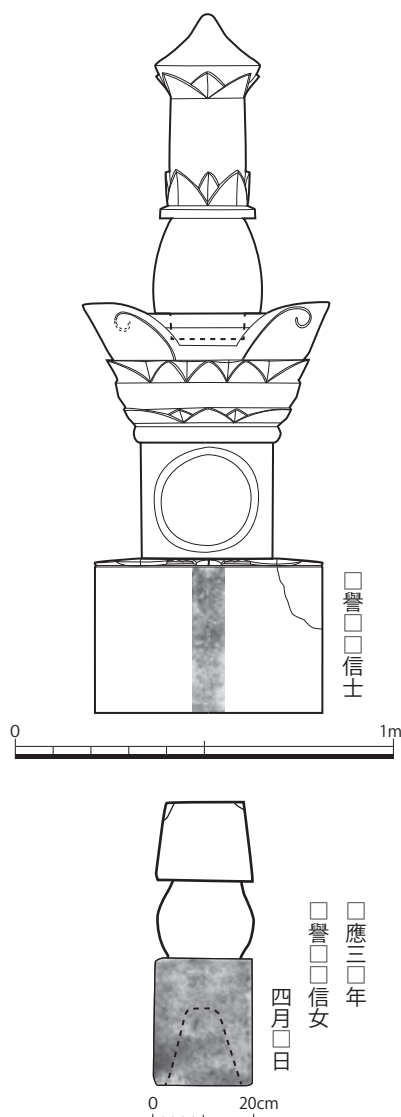


図5 定徳寺跡の岩窟内と付近の石塔実測図

開山の位牌は円相雲型の大型品で、須弥壇座が付き、高さは84cmである。中央の漆塗板には「當寺開山傳蓮社法譽慶公上人和和尚」の法名が彫られている。永く本堂に置かれていたため全体が煤けており、さらに文字の部分は黒漆が剥落している。この位牌は銀山の太谷からのものと推定される。2世から5世の位牌は平頭の札型で、高さは55cmである。表面の法名等は漆塗板に金字で表され、「當寺代々（各住職の法名）靈儀」とある。<sup>(注9)</sup> また、裏面には2世から5世の没年月日が彫られている。位牌の形態はその後の住職のものと同じである。4代の住職をまとめて1柱にされていることから、吾郷村へ移転した後に作られたと考えられる。



写真7 定徳寺本堂

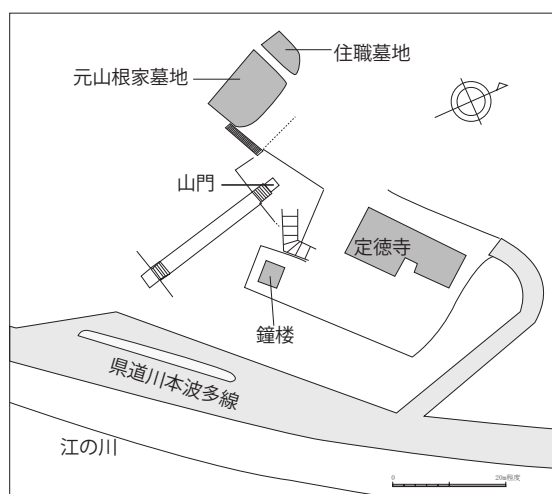


図6 定徳寺境内と墓地の位置図

**扁額（後陽成天皇宸翰）** 本堂内陣の長押に掛けられた寺額で、黒く塗られ縁をもち、縦112cm、横56cm程度の大きさである。紺色の額面に草書体で、「定徳寺」と金字で書かれている。

**境内地の岩窟と付近の石塔** 銀山の定徳寺跡の背後の崖面には岩窟が2箇所掘られている。左窟（西）は横幅4.3m、奥行1.3m、高さ1.5mで、右窟（東）は横幅4m、奥行1.6m、高さ1.5mで、各壁とも垂直で箱形になる。岩質が柔らかく、入り口は2穴とも風化が進んでいる。また、南側の一部に幅1.3mの3段の階段がつく。なお、左窟の左右の端の岩盤に径50～60cmの穴があり、庇を支える柱の柱穴と推定される。石塔は左窟3基、右窟には数基が存在していたと考えられる。左窟の左端には大型の宝篋印塔が置かれていたが、今は前方に倒れている。

この石塔（図5）の総高は190cm程で、銀山の石塔では最大規模を測る。<sup>(注10)</sup> 凝灰岩（福光石）製。

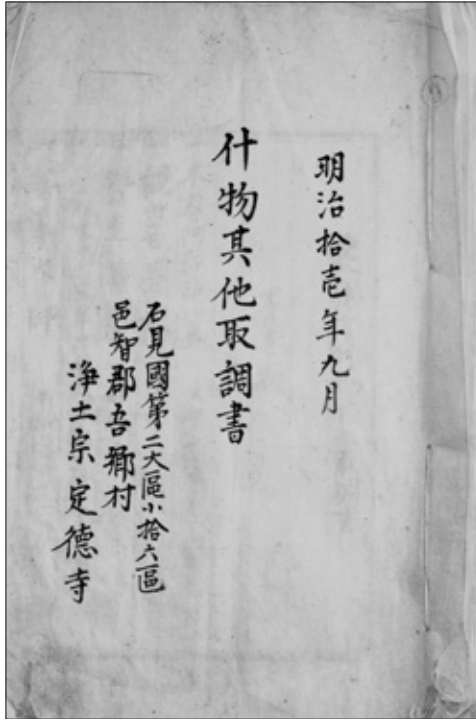


写真 8 什物其他取調書

相輪は、伏鉢の上方に突帯が廻り、その上部と宝珠の下方には蓮弁と間弁からなる請け花が付くが、九輪部には凹線はない。笠は軒の上部と下部に請花を二段にもち、隅飾には退化した蕨手文がつく。塔身は正方体で、正面には月輪が彫られている。但し、風化が進み、梵字は読めない。基礎は正方体で、上部に退化した反花をもつ。正面には字が彫られているが、風化が進み、数個の文字（「(梵字) □譽□□信士」）しか読めない。

凝灰岩（福光石）製の一石五輪塔は総高約60cm、最大幅（地輪）約15cmを測る。地輪は長方体で、水輪は縦に長い楕円形を呈し、火輪は直線的である。なお、地輪には「□應三□年／□譽□□信女／四月□日」と銘文があり、承応3年（1654）に亡くなった浄土宗信者の女性であることが示されている。

### 3. 邑智郡吾郷村での定徳寺

#### （1）松林山種勝院定徳寺の概要

定徳寺は美郷町吾郷の東方に位置しており、江の川の右岸の急峻な斜面中腹に所在する。参道入口には県道川本波多線が南北方向に敷設されている。

当寺院は浄土宗知恩院派に属し、現住職で二十二



写真 9 本堂の喚鐘

世となる。また、石見霊場においては8番札所として知られている。<sup>(注11)</sup>

石見銀山にあった定徳寺は宝永7年（1710）に移転されている。当時の住職は6世還譽了空である。移転及び再建については吾郷村の元山根家が多額の資財を投じており、現在の寺院所有物の多くは元山根家が寄付したものである。「寺伝」には山根八左衛門種勝が本堂、鐘楼、庫裡、山門などを建立したと記録されている。このうち、本堂については「寺伝」に残された棟札の写しにも記されている。「宝永七年龍集庚寅南呂下浣二／御奉行都築小三郎尉正明公／中興開基／本運社還譽上人尊阿二童了悦和尚／山根八左衛門尉種政／合棟梁湯里村 安江利右衛門／脇棟梁湯里村 安江礒右衛門／同志学村 中村礒右衛門／小工十人」<sup>(注12)</sup>とある。棟札の写しから、山根八左衛門種政が大森の奉行（当時は代官）の許諾を得て本堂を建立したことが読み取れる。

什物などは定徳寺に残る文献史料に詳しく記載があり、今回参考としたものは「什物其他取調書」と「臨時宗執調査申告書」である。

以下、前述の資料を参考としながら、仏像をはじめ、各資料について概略を説明する。

表 1 定徳寺所蔵史料及び什物

No	資料名など	縦・高さ	横・幅	備考
1	内過去帳 1 号	28cm	20cm	
2	内過去帳 2 号	28cm	20cm	
3	内過去帳 3 号	28cm	20cm	
4	臨時宗執調査申告書	28cm	20cm	昭和 2 年 7 月作成
5	什物其他取調書	27cm	18cm	明治11年 9 月作成
6	日月牌過去帳	28cm	20cm	
7	田畑寄附記録	29cm	20cm	延享 3 年から明治22年まで
8	定徳寺側面図・正面図	40cm	55cm	明治22年作成（50分の 1）

表 2 定徳寺の什物其他（表 1 No.5「定徳寺什物其他取調書」より八左衛門と関係のある項目を記す）

No	分類	名称	法量	備考
1	第 1 類	本尊阿弥陀如来	五尺一寸（台座共）	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
2		観世音菩薩	三尺三寸（台座共）	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
3		勢至菩薩	三尺三寸（台座共）	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
4		阿弥陀如来	四尺五寸六分 台座共	□□不詳天正年中開山慶公和尚購求メ傳來
5		善導大師	三尺一寸（台座共）	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根法譽再興ス
6		円光大師	三尺一寸（台座共）	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根法譽再興ス
7		卅三所観音卅二鉢	－	十九鉢一尺三寸、十三鉢一尺 厨子入 / 年度不詳 山根八左衛門寄付
8		地藏菩薩	四尺五寸六分	石仏 境内安置年度不詳 山根八左衛門寄付
9		地藏菩薩	貳尺八寸	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根法譽再興ス
10		地藏菩薩	貳尺八寸	宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根法譽再興ス
11	第 2 類 (仏具什器之部)	九品曼荼羅 壺幅	幅七尺 / 長九尺	總金□色 / 明治一一年四月一五日當寺山根法譽購求附 【箱書】曼荼羅一幅 石見國邑智郡吾郷村 定徳寺永代什物也 明治十一年三月佛日求之 住職 山根法譽代
12		釈迦涅槃像 壺幅	幅七尺 / 長壺□	極彩色 / 年度不明 / 山根八左衛門寄付
13		六字名号 一幅	－	祐天上人ノ書
14		三部經 壺部	－	紺紙金泥ニテ四卷篋入 / 山根八左衛門書写 寛保元酉年五月十五日山根八左衛門寄付
15		寺号勅額 壺面但立額	－	干支不詳慶長年中ノ頃二代目住職超譽和尚代ヨリ傳來
16		佛天蓋 壺蓋	－	木造 / 宝永七寅年當村山根八左衛門寄付
17		花曼	－	四流但銅鍍金 / 宝永七寅年山根八左衛門寄付
18		花御堂并花幔幡共	－	壺字但□方付也 / 年度不詳 山根八左衛門寄付
19		金燈籠	－	壺封内一ッ損ン但唐金 / 年度不詳 山根八左衛門寄付
20		佛飯器 卅五本但□金	－	年度不詳 山根八左衛門寄付
21		大花瓶 壺封但真鍮	－	天保七申年八月邑智郡吾郷村山根利右衛門寄付
22		双盤 壺封	－	年度不詳 山根八左衛門寄付
23		喚鐘 壺口	－	宝永五子年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付
24		鐺鉦 壺組	－	年度不詳 山根八左衛門寄付
25		銅鉦 壺筒	－	年度不詳 山根八左衛門寄付
26		淺黄地七条 壺枚	－	緞子 年度不詳當郡當村山根八左衛門寄付
27	第 2 類 (建物部)	本堂 薬葺	－	縦六間 / 横四間半 / 三方縁付 宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門建立寄付
28		庫裡 柿葺	－	縦九間 / 横五間 □□不詳天明年中當寺十世住職綜譽和尚購永建立
29		總門 瓦葺	－	縦横一間四方 明治九年三月當村山根六十郎寄付
30		鐘樓堂	－	瓦葺 但縦横九尺四方 / 但年度不詳 旧傳來
31	第 2 類 (耕宅地山林之部)	田・畠・宅地・寺地・ 草山・竹藪・雜木山・ 墓地	－	※耕宅地における詳細は紙面の都合上省略する。（筆者付記）
32				明治十一年九月三十日 山根法譽㊤ / 同国同大邑同小邑同郡 / 同村百廿番舍 / 檀家総代 / 山根六十郎㊤（ほか総代 2 名の書名、捺印）

※ No.13は徳川將軍家菩提寺である増上寺（東京都港区）の36世祐天大僧上の書で、元文 3 年（1738）弟子の祐海が山根八左衛門種勝宛に送ったものである。

※ No.32の山根六十郎は元山根家 5 代山根八左衛門である。

## （２）定徳寺所蔵の史料

### 古文書（九々王山定徳寺田畑寄附記録・什物其他取調書・臨時宗執調査申告書）

**九々王山定徳寺田畑寄附記録** 竪帳で、8世岸譽上人の時、延享3年（1746）に作成。その後、寛延3年（1750）、弘化元年（1844）に追加があり、明治22年（1889）の吾郷村に存在した曹洞宗の岩松寺跡を処分した記事を最後にして終わる。書かれた内容は、簡単な寺伝から始まり、次に寺の「境内地、山林、田、畠」についての寄付、「常念佛料寄付田畑之事」となり、供養者の法名と寄付者名、土地や金額が記録されている。

**什物其他取調書** 竪帳で、19世法譽選山の時の明治11年（1878）9月に、役所に申告したものの控えとして作成された。最後の項に、住職、檀家総代（3名）、吾郷村用係担当職員が署名捺印し、さらに区長、戸長、副戸長が確認をしている。冊子の構成は第1類が仏像、經典、過去帳、六字名号、勅額、第2類が仏具、什器、建物、耕宅地、山林が詳細に記述され、分かるものについては入手時期や山根八左衛門をはじめ寄付者も書かれている。

**臨時宗執調査申告書** 昭和2年（1927）7月に作成の竪帳が1冊ある。浄土宗務所の申告した書類の控えであり、前掲の取調書と内容が似ている。明治32年（1899）にも同様な調査があったことが表紙に注記されている。罫紙には記述項目が印刷されており、本尊、由緒、沿革、年中行事、歴代住職が記載されている。それに続き、財産明細帳調査書が綴られ、第1類仏像、第2類宝物、第3類什物、第4類地所（土地）・境内・墓地・山林、第5類建物、第6類什金、第7類雑種等が詳しく挙げられている。分かるものについては入手時期や寄付者も書かれている。

## （３）定徳寺と元山根家（八左衛門）との関係が分かる資料

**喚鐘** 本堂の西側の庇に吊るされている。総高は56cm、底部の径は33cmで、竜頭は双頭竜形で、撞座は16の蓮子をもち、池の間に銘文がある。銘文は3ヶ所あり、一箇所目には「願主 山根八左衛門尉 / 種

政 / 宝永八辛卯天五月廿三日」とあり、二箇所目には「諸行無常 / 是生滅法 / 生滅人已 / 寂滅已樂 / 京大佛住 / 西村左近丞宗春作」、三箇所目には「石州邑智郡吾郷村 / 松林山定徳寺種政院 / 常什物」とある。宝永8年（1711）に、京都の鋳物師左近拯呆（宗）春によって作られたことが分かり、願主は山根八左衛門種政（種勝）で、涅槃經の四句偈の一つが彫られている。なお、元山根家が檀那となった吾郷村の弥勒寺にも二代種勝の妻の千代が寄進した喚鐘<sup>(注13)</sup>が残る。

**華鬘** 莊嚴具であり、内陣の長押に對で掛けられている。金銅製の団扇型で、蓮の花を透かし彫りで表している。紐の結びの中央に「松林山定徳寺常什物施主山根八左衛門種政」の文字が彫られている。

### 仏像（木造善導大師立像・木造円光大師立像）

定徳寺には本尊以外にも多くの仏像が安置されている。岩松寺など、付近の廃寺となった寺院や現本堂前にあった石見番外札所の三十三観音堂（1間四方）から持ち込まれる仏像があるほか、近年注目された白鳳仏の銅造観音菩薩立像も伝来している<sup>(注14)</sup>。これらの内、幾つかの仏像を取り上げて記載する。

**木造善導大師立像** 善導大師は中国唐代の浄土教の高僧。本像は木造で、高さ約40cmを測る。仏像は表面に彩色が見受けられる。三尊像の隣に厨子が設けられ、その中に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根法譽再興ス」と記されており、山根八左衛門が宝永7年（1710）に寄付し、明治6年（1873）には19世山根法譽選山が修繕または新調していることが説明してある。本像は宝永7年以前に作成されたものと考えられる。

**木造円光大師立像** 開祖法然の像である。木造で、高さ約45cmを測る。仏像には彩色が見受けられる。三尊像の隣に厨子が設けられ、その中に安置されている。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付 / 明治六年三月住職山根



写真10 華鬘（内陣東側）



写真11 仏説無量壽經卷下



写真12 本尊木造阿弥陀三尊座像



写真13 木造善導大師立像



写真14 木造円光大師立像



写真15 浄土曼荼羅（美郷町教育委員会撮影）



写真16 釈迦涅槃図（美郷町教育委員会撮影）



写真17 歴代住職墓（東下方から）



写真18 山根八左衛門種勝と妻千代の墓標  
(正面中央に「當山開基大檀那」と彫られている)



写真19 定徳寺参道と山門周辺の石垣

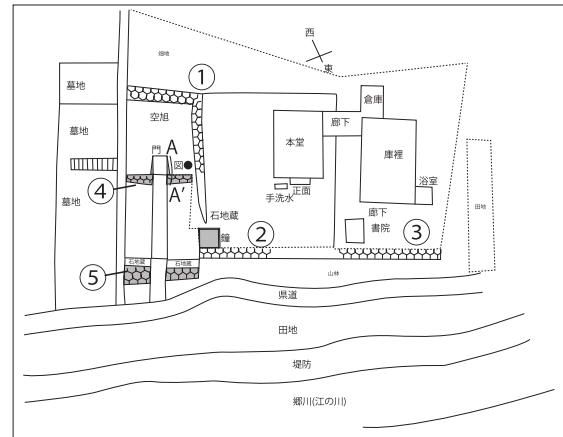


図7 境内と石垣の配置図  
(「臨時宗執調査申告書」の図面に一部加筆)



写真20 定徳寺山門下の階段と北側石垣

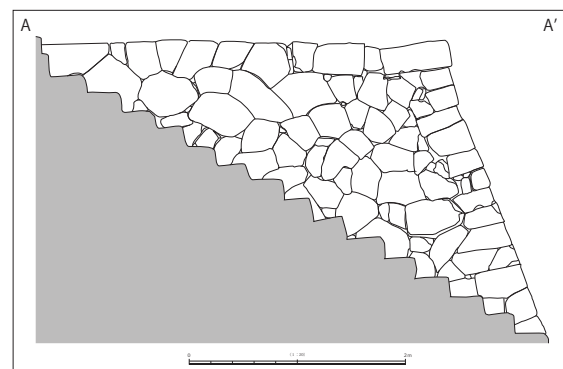


図8 定徳寺山門下の北側石垣実測図

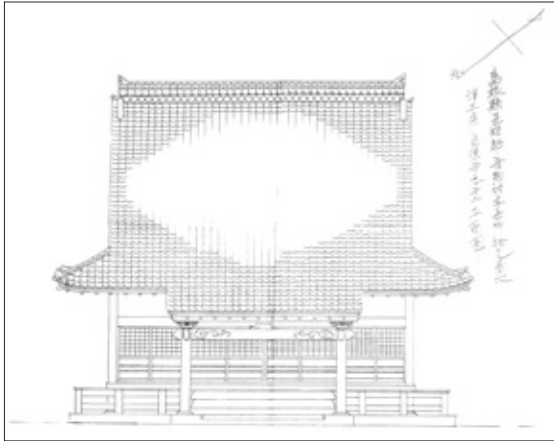


写真21 浄土宗定徳寺本堂正面図



写真22 浄土宗定徳寺側面図

法譽再興ス」と記されている。本像は宝永7年以前に作成されたものであると考えられる。

**本尊木造阿弥陀三尊像** 阿弥陀如来の坐像を中心に、左右に観音菩薩・勢至菩薩像が配されている<sup>(注14)</sup>。

「定徳寺什物其他取調書」には「宝永七寅年邑智郡吾郷村山根八左衛門寄付」と記載があり、宝永7年以前に作成されたものであると考えられる。

**經典** 上記の「取調書」に載る經典は仏説阿弥陀經、觀無量壽經、無量壽經（上・下）の計4点が挙げられる。また、「寛保元酉年五月十五日山根八左衛門寄付」とあり、山根家が寛保元年（1741）に寄付したことが記載されている。4点とも縦30cm、横10cmの折本となっており、中は紺紙に金泥で写経している。このうち、佛説無量壽經下の奥書には「奉浄土三部妙典全部一部書寫九九王山種勝院定徳寺常什物納経仕意趣者為慈父頓譽教慧居士第 / 五十年忌慈母延譽貞壽信尼第三十三回忌追福也 施主 觀譽諦慶居士謹書寫 / 干時寛保元辛酉年五月十五日 俗名二世 山根八左衛門種勝（花押）」と書かれており、種勝が父種家（初代）、及び母千代（初代妻）のそれぞれ、50回忌、33回忌に併せて、經典を寄付していることが分かる。また、写経は種勝によるものであると記載されている。

**仏画（釈迦涅槃図・浄土曼荼羅図）**

**釈迦涅槃図** 釈迦が入滅した情景を描いた図である。山根八左衛門が寄付したと伝わり、江戸時代中期の作であると考えられる。<sup>(注15)</sup>

**浄土曼荼羅図** 諸仏の浄土を描いた曼荼羅である。

19世山根法譽選山が購入したと伝わる。箱書きには「曼荼羅一幅 石見國邑智郡吾郷村 定徳寺永代什物也 明治十一年三月佛日求之 住職 山根法譽代」と書かれており、明治11年（1878）以前に作成された仏画と考えられる。また、「臨時宗執調査申告書」には「元岩松寺附山根八左衛門寄附 / 明治十一年山根法譽□□寄附」と記載がある。曼荼羅図は元々岩松寺の所有であったものを廃寺に際して、仏像と共に定徳寺へ寄付したものであると考えられる。なお、岩松寺（岸松寺）は覚法寺の西側に位置していたが、明治9年（1876）に廃寺となっている。

#### （4）定徳寺に残るその他文化財

**歴代住職墓（無縫塔）** 歴代住職の墓地は山門より西側の尾根上に位置している。この尾根上には元山根家墓地が設けられており、住職の墓地はそれより高い場所に位置している。

墓石は尾根上に平坦面が作り出され、東西方向に約7.7m、幅1m、高さ50cmの地元産デイスait製（注16）の基壇上にある。無縫塔は歴代住職のもので、開山から21世までの計12基が配置されている。

以下、数基について記述する。

墓石は北端から2基目（2世超譽残香の墓石）が花崗岩製で、請花等を伴わない。総高107cmを測り、塔身の高さは68cm、最大径が28cmである。基礎の上端は面取りされている。北端より3基目（3世の墓石）からは凝灰岩（福光石）製となり、請花等は伴わない。6基目（6世還譽了空の墓石）は総高96cm

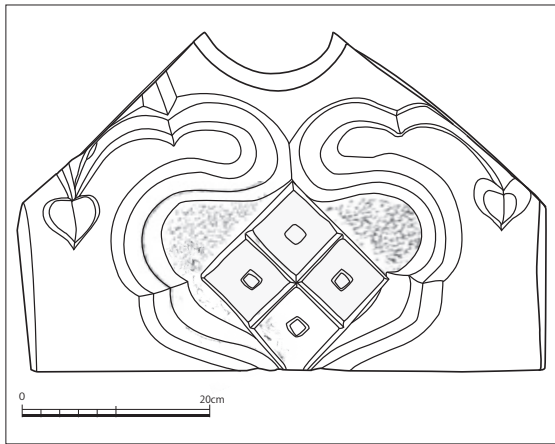


図9 定徳寺本堂鬼瓦実測図（「四つ目結」が付く）

を測り、塔身の高さは53cm、最大径が29cmである。基礎の上端は面取りを伴わない。同様の形態は10基確認される。これら墓石が配置される基壇はデイサイト製であることは前述したが、デイサイト製の基壇については邑智郡美郷町内のいくつかの石塔調査において確認されており、当地域における共通した特性であると思われる。

石塔群の配置順については墓石には住職の法名と世代が刻まれており、世代を見ると開山から順に基壇北端から配置されている。ただし、世代と法名が同一でない例が確認される。

墓石は移転した6世還譽了空のものよりも先の5世までが吾郷村に移ってから新たに作り直していると考えられる。北端からの2基とその他で石材、形態で差異が生じるのは作り直しの時期などの違いが関係していると思われるが、詳細は不明である。

**山門の石垣** 石垣は境内の図7の箇所位置している。図中の①～③は自然石及び割石の乱積みによる普請であるが、④、⑤は切石乱積みとなっている。④の箇所では花形と思われる築石から、岡山市の南部で活動した備前石工の得意とする技術を確認できる<sup>(注16)</sup>。また、当石垣については、築石間に隙間が存在しており、中には間詰石を挟んでいる箇所もある。全体に老朽化が見受けられる。

①～③と④、⑤の石垣については積み方の違いから普請時期に差があると考えられ、「石見銀山における石垣の分類と変遷」<sup>(注17)</sup>では自然石による乱積みの石垣は古くから存在する技法であり、切石積

みの石垣は19世紀頃から見られるものであるとされる。

①～③の石垣はおおよそ境内を囲むように積まれている。このうち、参道に面する南側の石垣はその他の乱積み石垣と比べると高さなど、規模が大きい。また、石垣は現在の境内を方形状に囲うように積まれているが、本堂南西箇所は南西方向に突き出している。突き出した箇所の整地面は現在畑地であるが、「寺伝」によると春日大明神の社が所在したとされている。

本堂南西箇所の石垣は入組んだ構造(枅形)になっており、浄土宗の寺院に見られる特徴であるとされる。そのため、石垣は境内を囲う意味のみではなく、参道付近の特徴的な構造を表現するために普請されたと思われる。

①から③の石垣については、元山根家「系図」の傳右衛門の子傳蔵と関係する記載がある。「寺の寺領を開き、石垣を積む」とあり、18世紀前半頃に2代八左衛門の甥の傳蔵が当石垣を普請した箇所に当たる可能性がある。

④、⑤については県道付近から山門までに2箇所、鐘楼基壇の3ヶ所で確認できる。このうち、山門下の石垣は山門と築造時期を同じにすると考えられる。「什物其他取調書」に山門は「縦横一間四方／明治九年三月當村山根六十郎寄付」と記載があることから、それぞれ明治9年（1876）の普請であると考えられる。なお、山門は控柱が四本存在する四脚門で、屋根には石州瓦が葺かれている。

**明治22年（1889）の本堂図面と鬼瓦** 本堂の図面は正面図と側面図の2枚がある。共に「島根県」の文字が見受けられ、「臨時宗執調査申告書」の本堂の箇所に「明治廿二年屋根改築」とあることから、明治22年（1889）の19世（法譽選山）の時に改築を行った際、作成されたものであると考えられる。また、改築時の元山根家当主は八代山根隆直であり、明治22年から大正15年（1926）の間に4期吾郷村村長を勤めた人物である<sup>(注18)</sup>。改築は隆直が村長に就任した最初の年にあたる。

正面図は縦40cm×横50cmの用紙に、50分の1の本

堂正面図が描かれている。側面図は本堂側面が正面図同様に表現されている。図面から改築後の本堂は間口4間半、奥行6間となり、本堂の屋根に赤瓦の石州瓦が葺かれていることが分かる。「定徳寺什物其他取調書」には、本堂が藁葺きであると記載があるため、少なくとも明治11年（1878）までは藁葺きであるが、明治22年の改築まで、藁葺きであった可能性が高い。また、「定徳寺什物其他取調書」と図面における本堂の間口は同じであるため、平面的な大きさには変化が見受けられない。

図面中の棧瓦は現在の石州瓦に葺き替えられ、不要となり、鐘楼の脇に置かれている。赤い釉薬で塗られた鬼瓦は縦36.2cm×横56.4cmで、側面に2ヶ所、上面に4ヶ所、下面に2ヶ所のほぞ穴が存在する。なお、正面には「山根家」の家紋である「四つ目結」が表現されている（図9）。

#### 4. 小結

##### （1）創建期から移転までの定徳寺と墓地（石塔）

石見銀山の繁栄と銀山に点在する寺々の造立とは前述したように深く関わっている。寺院の造営を創建年別に見ると、1500年代が23寺、1643年までが16寺となり、江戸時代初めて、全体の9割を占める。<sup>(注19)</sup> また、石見銀山の六谷に所在する墓地群は天正期の1580年代以降に成立し、そのころに開山した寺院は谷合や尾根上に存在する。寺が点在する鉾山集落の背後の尾根には墓域が形成されていたと考えられる。

定徳寺も天正期間に大谷の往還沿いに建立され、江戸時代初頭には有力寺院の一つになっていたと考えられ、「寺伝」に記載の後陽成天皇の勅額や紫衣の下賜などがそれを裏付けている。さらに、寺跡の背後にある徳善寺上墓地には、天正期から寛永期（1624～1644年）にかけての紀年銘の法名に「譽」号をもつ浄土宗の石塔が多く見つかっている。<sup>(注20)</sup> また、寺跡の背後の崖面に穿かれた二箇所の岩窟があり、西側の窟には宝篋印塔が現存する。基礎に彫られた法名には「信士」の銘が認められる。石材は緑色凝灰岩（福光石）で、総高2m程の組合せ式石

塔であり、大規模な石塔といえる。17世紀前半のもので、大型石塔は銀山に関わる山師等の檀那層の供養塔と推定される。<sup>(注21)</sup>

##### （2）定徳寺の銀山からの移転

その後の17世紀中頃になると、銀の産出量が減り、併せて銀山での人口も減少の一途をたどる。これにより寺院の維持も難しくなり、17世紀中頃から18世紀初頭にかけて、銀山から他地域へ移転する寺院も多くなる。<sup>(注22)</sup>

墓に残る石塔の紀年銘からみても、17世紀中頃のもものは少なく、人口減少を裏付けていると考えられる。前出の徳善寺上墓地でも、この時期以降の石塔は少なくなる。<sup>(注23)</sup> この時期には銀山の六谷にあった定徳寺を支援する檀那がいなくなったと推定され、住職の3世～5世以降の17世紀後半には寺は荒廃したと推定される。このことは「寺伝」に「年年衰微檀越漸漸散因茲四十年來主盟不住」（写真2）と記されている。

##### （3）定徳寺移転と山根八左衛門

定徳寺の移転を行ったのは邑智郡吾郷村の山根八左衛門種勝（1675～1745）で、元禄期から享保期にかけての人である。山根家は江戸時代には「新屋」（屋号）と呼ばれ、村役人や庄屋を務めた旧家である。2代種勝は17世紀後半に財をなし、菩提滅罪のために石見銀山の六谷にあった荒神寺（移転後の寺号は弥勒寺）と定徳寺を吾郷村に移転させて再興している。また、同村の氏神である天津神社においても多額の寄付を行っており、同社の棟札にも八左衛門の名前が多数載る。<sup>(注24)</sup> 現在、社殿前に建つ享保2年（1717）銘の鳥居には寄進者である長兄傳右衛門と四男八左衛門の名前が認められる。<sup>(注25)</sup> 元山根家は江戸時代を通して地元の有力者であったが、昭和47年（1972）の江の川水害等で史料の多くが失われ、詳細なことは不明である。また、前記の弥勒寺は本尊弥勒菩薩座像と喚鐘を残すのみであり、縁起や移転の様子を知る史料は残されていない。よって、ここでは定徳寺の移転についてのみ見てみたい。

寺の移転は前述したように江戸時代中頃の宝永7年（1710）で、6世還譽了空（了悦）の時にあたる。

元山根家の2代八左衛門種勝が堂宇を建立し、明治11年（1878）の「什物其他取調書」に書かれているように、仏像や仏具をはじめ寺領等の財産も同時に寄付している。なお、大森町の大谷から移されたものは仏像や仏具は前述したように、本尊の木像阿弥陀如来立像や扁額などに限られたもので、墓地や石塔は現地に残されたままとなっていたと推定される。仏像では本尊の阿弥陀如来坐像と勢至菩薩坐像、観音菩薩坐像をはじめ、善導大師立像、円光大師立像等を寄付し、建物としては本堂、庫裏、鐘楼、山門などを建立している。さらに、元山根家の「系図」には元山根家の一族で、八左衛門以外で寄付をしたことが分かる人物として、前述した傳右衛門の長男の傳蔵がいる。「系図」には境内南側の石垣を築いていたとある<sup>(注26)</sup>。時期からみて、山門の崖面に積まれた自然石の石垣がこれにあたるであろう。

江戸時代中期に、「寺伝」に記載のように寺の移動については元山根家の財力によるところが大きい。ただし、「什物其他取調書」を見ると、地元の吾郷村をはじめ、周辺の浜原村等の檀家の名前も僅かであるが、書かれているので協力者の存在も考える必要がある。

#### （４）移転する寺院と援助者（大檀那）

寛永期以降の銀生産の減少に伴い鉾山集落が衰退し、<sup>(注27)</sup> 鉾山から寺院が邇摩郡内をはじめ、隣接の安濃郡、邑智郡の江の川沿いの村に、17世紀末頃から18世紀初頭の元禄期から享保期に掛けて移転した例が多い。<sup>(注28)</sup> この移転を促し、援助を行った定徳寺の山根八左衛門のような援助者（大檀那）を『石見鉾山百か寺』の記述より拾い上げると表3となる。

名前をみると、農村では庄屋などの村役人を兼ねた豪農が多く、江の川沿いの町や日本海の港町では有力商家も含まれる。また、定徳寺の場合は援助の内容が「什物其他取調書」等の史料に記載があり、仏像、仏具、建物や田畑、山林などの財産等が具体で知れる。しかし、石見鉾山百か寺の場合は既に数百年も経ており、史料の残り具合もそれぞれに異なるので、個々の寺を調べて、参考にするしかないであろう。

#### （５）定徳寺調査の課題

最後に今後の課題を4点に絞り、列記したい。

まず、1点目に移転前の定徳寺についてである。16世紀後半の開山法譽慶公と本山の輪番職に任じられた2世起譽残香の経歴は「寺伝」以外では今のところ史料などの情報が殆ど存在しない。それらの情

表3 石見鉾山から移転した寺院の援助者（大檀那等）（『石見鉾山百か寺』を元に作成）

石見鉾山百か寺	宗派	移転に関わった援助者（大檀那等）	移転年代
明顕寺	浄土真宗	本釜田家（邇摩郡静間村）	寛永年間か、享保年間
法専寺	浄土真宗	恒松源兵衛（安濃郡鳥井村）	寛永17年
法久寺	浄土真宗	釈斎賀（邇摩郡福原村）→ 同郡湯里村	安永9年
弥勒寺（旧荒神寺）	真言宗	山根八左衛門（邑智郡吾郷村）	元禄年間
専念寺	浄土宗	郷原勝久（邇摩郡湯里村）	元禄2年
報恩寺	浄土宗	丸山七郎兵衛外檀家（邇摩郡磯竹村）	元禄2年
専応寺	浄土真宗	堀平左衛門（那賀郡上河戸村・庄屋）	元禄13年
定徳寺	浄土宗	山根八左衛門（邑智郡吾郷村）	宝永7年
蓮花寺	浄土宗	平田貞右衛門（邑智郡川本村）	正徳2年
淨国寺	浄土宗	堀兵左衛門（那賀郡上河戸村・庄屋）	正徳4年
大満寺	浄土宗	石川勘左衛門（安濃郡鳥井村・元鉾山役人）	享保元年
浄土寺	浄土真宗	前原家（邇摩郡久利村・檀頭）→ 同郡長久村	享保年間以前
快算院普門寺（旧光厳院）	真言宗	森久兵衛（那賀郡都治本郷）	享保8年
瑞巖寺（旧徳巖寺）	曹洞宗	恒松六右衛門（安濃郡長久村・頭百姓）	享保8年
西善寺（旧西善坊）	浄土真宗	森山家（邇摩郡久利村）	—
勝音寺	曹洞宗	中原三郎兵衛（年寄・頭百姓）一族（邇摩郡大國村）	（17世紀後半～18世紀初頭）

報は本山や浄土宗の寺院など、関係する古文書や文献の調査を行う必要がある。

2 点目は16世紀後半から17世紀前半にかけての石見銀山繁栄期において定徳寺を支えた大檀那についてである。移転前の寺院の様相を知る上で必要な情報であったが、今のところ史料がなく、どのような人々が関わっていたか不明となっている。今後の文献史料調査や墓地・石造物調査等の成果を待ちたい。

3 点目は宝永年間の移転に関する八左衛門種勝についてである。移転の実態は百か寺に共通する事項であるが、江の川沿いの邑智郡吾郷村に寺を再興した際、援助した八左衛門種勝の事績は古文書や記録類が失われており、殆ど不明となっている。これについては地域での文献史料をはじめとする各分野の調査に待ちたい。

4 点目は、18世紀前半の移転、再興した定徳寺と吾郷村をはじめ周辺の村々の檀家との関わりである。これも3 点目同様に重要であるが、不明な点が多い。今後、過去帳や位牌をはじめ、各専門分野から調べていく必要がある。

## 5. おわりに

### ―石見銀山における寺院調査の必要性―

戦国期から江戸時代初頭の銀山最盛期には、銀山六谷と呼ばれた仙の山周辺の鉱山集落に多くの寺院が存在していた。その場所については、これまで大田市教育委員会の銀山遺跡調査の一環として埋蔵文化財分布調査をはじめ、明治期に作成された地籍図の字名調査等である程度、場所や規模が確認されている。また、江戸時代や明治期の古文書や絵図などからも調べが進んでいる。一方、銀山に点在する墓地や石塔についてもここ二十年来の島根県教育委員会と大田市教育委員会による石造物調査で、墓地の分布や石塔・墓標の種類や変遷など、多くの調査成果があがっている。<sup>(注29)</sup>

民間機関の調査としては平成7年に刊行された三瓶古文書を読む会の『石見銀山百か寺』がある。この書籍は個々の寺院の創建から変遷までが簡潔に記述され、各寺院の由緒・縁起を把握するうえでは

貴重である。ただし、寺院調査の現状についてみると、多くの指定文化財を有す清水寺<sup>(注30)</sup>をはじめとして、大森町に所在する寺院では専門家による総合調査はこれまで行われていない。また、その後に銀山から他地域へ移転した寺院も、多くが過疎地に存在しており、前述した課題を含め、史料の確認、聞き取りは早急に行うことが望まれる。

最後に、この度の定徳寺の報告が石見銀山各地域での寺院調査の契機になることに期待したい。

## 謝辞

定徳寺住職門田行陽様には3年前の元山根家の墓地調査から始まり、今回の定徳寺の調査に至まで多くのご教示を頂きました。厚くお礼申し上げます。また、元山根家の山根千代様をはじめ、多くの方々にもいろいろとお世話になりました。記して感謝致します。

機関：定徳寺、美郷町教育委員会

個人：岩谷知広、岩橋孝典、遠藤浩巳、尾村 勝、門田行陽、清水佳那子、新川 隆、仲野義文、乗岡 実、幡中光輔、的野克之、三上利三、八幡一寛、山根千代、山根昌子

(50音順、敬称略)

## 注

- (1)『石見銀山百か寺』三瓶古文書を読む会 1995
- (2)元山根家2代で、初代八左衛門種家の四男。(西尾克己・幡中光輔・持田直人「邑智郡美郷町 元山根家墓地の特質と墓標の変遷」『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究12』島根県教育委員会2022)
- (3)「内過去帳一号」の最初に書かれた由緒書である。ここでは「寺伝」と記す。
- (4)『邑智町誌』下巻1978、「定徳寺」『石見銀山百か寺』三瓶古文書を読む会 1995
- (5)本山で説教や法話を行う当番の僧
- (6)「土地令の絵図」木曾家所有 明治4年(1871)作成
- (7)『旭町誌』旭町1977
- (8)吾郷村に移転の後に、関係があった浄土宗寺院の住職の位牌も存在している。
- (9)位牌の型式は『仏具大事典』株式会社鎌倉新書1982による。

- (10) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 石見銀山〔龍昌寺跡〕』 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2002
- (11) 『秘仏への旅―出雲・石見の観音巡礼―』 鳥根県立古代出雲歴史博物館・鳥根県古代文化センター 2008
- (12) 『邑智町誌』下巻 邑智町1978「定徳寺」の項の「寺伝」による。棟梁安江利右衛門は大森の域上神社境外社長砂神社本殿（元禄7年(1694)）などの造営に関わった大工である。（『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告書別冊2―史跡石見銀山境内建造物（10社寺）調査報告書―』鳥根県大田市 2013）
- (13) 弥勒寺の喚鐘には「施主 山根六良左衛門種勝室 / 於千代 / 本願開山□□□戒観 / 享保五庚子年九月吉辰」とある。なお、弥勒寺は吾郷村に位置する真言宗の寺である。元々、銀山大谷に荒神寺として建立されたが、元禄年間に種政（種勝）によって当地へ移転したという。（『邑智町誌』下巻 邑智町 1978）、移転に際して寺号を弥勒寺に改めたと寺伝にあると記す。
- (14) 注（11）に同じ。
- (15) 『美郷町の文化財』美郷町教育委員会 2022
- (16) 乗岡 実「石見で活躍した備前石工」『石見銀山研究―2号―』石見銀山研究会 2022
- (17) 尾村勝・新川隆・乗岡実・西尾克己「石見銀山における石垣の分類と変遷―温泉津及び周辺地域を中心として―」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2023
- (18) 『邑智町誌』下巻 邑智町 1978
- (19) 注（1）に同じ。黒河邦之「石見銀山寺院調べ」1986（私永版）でも創建年代を表にまとめている。
- (20) 2023年度に、鳥根県教育委員会と大田市教育委員会とにより石見銀山遺跡石造物調査の一環として大谷地区の徳善寺上墓地の石塔調査が行われている。
- (21) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 石見銀山―分布調査と墓石調査の成果―』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2005
- (22) 注（1）に同じ。
- (23) 鳥根県教育委員会文化財課の岩橋孝典氏、大田市教育委員会石見銀山課の尾村勝氏、新川隆氏の教示による。
- (24) 『邑智町誌』下巻（邑智町1978）の「天津神社」、「社殿等の沿革（棟札）」の項による。
- (25) 鳥居の東側にある柱の銘文には「奉寄進 山根八左衛門藤原種勝 山根傳右衛門藤原種喜 敬白」とある。また、石材は瀬戸内の花崗岩で、石工は和泉国の工人である。永井泰・齋藤正2014『鳥根の石造物データ―狛犬を中心とした幻の石工達の実能にせまる―』（人名については一部修正）
- (26) 美郷町吾郷にある覚法寺の境内には、山根傳蔵が元文5年（1740）3月に建てた「南無阿弥陀佛」の六字名号碑が残る。なお、傳蔵の名は天津神社の「棟札」からも確認できる。（波多野虎雄「神社」『邑智町誌』下巻 邑智町 1978）
- (27) 仲野義文『銀山社会の解明―近世石見銀山の経営と社会―』清文堂2009
- (28) 仲野義文2006「江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について」『宗門改帳からみる山陰の近世社会』山陰宗門改帳研究会
- (29) 『石見銀山遺跡石造物調査報告書21―分布調査と墓石調査の成果（2005～2022）』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024
- (30) 石見銀山遺跡地内に現存する主要な寺社建造物については、大田市教育委員会により基礎的な資料を得ること等を目的に調査が実施されている。『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告書別冊2―史跡石見銀山境内建造物（10社寺）調査報告書―』鳥根県大田市 2013